

「仮想」の歴史

一 はじめに

本稿では、「仮想」という漢語の歴史と、使い方の変化をまとめる。

「仮想」は、現代では「virtual（バーチャル）」の訳語として使われることが多い。例えば、NHKのニュースでは、「VR（バーチャルリアリティー）」に言い添える形で次のように使われている¹⁾。

VR（バイアール）、仮想現実の技術に対応したゴーグルを着けることで、ゴーグル下の迫力ある映像を楽しめるようにしました。

（二〇一九年八月二十五日 ニュース845の放送で確認）
また、国立国語研究所の「外来語」言い換え提案（二〇〇六）に、「バーチャル」の言い換え例として「仮想」、「バーチャルリアリティー」の言い換え例として「仮想現実、人工現実感」が示されている。

山下 洋子

こうした「バーチャルリアリティー」の言い換え語「仮想現実」については、否定的な意見が聞かれる。例えば、次のような意見である（小谷野、二〇一四）。

日本では、1980年代から「バーチャルリアリティー」などという言葉が用いられて、これが「仮想現実」などと訳されるため、「ヴァーチャル」が「仮想の」という意味だと思われるに至っているが、「ヴァーチャル（virtual）」は「実質的な」という意味なので、この訳語は英語の原語が持っているニュアンスとそれが使われた背景を消してしまう、不適切なものである。

また、館ほか（二〇一二）のように、VRを開発し、導入しようとしている専門家が「誤訳である」あるいは「違和感がある」と意見を述べているものがある。

明治以来このかた、バーチャルという言葉や仮想という言葉のような誤解を招きやすい訳語を使い続けてきたのは、決して訳した人がそのように意図したのではない。

明治時代に「virtual」という英語が日本に入ってきていたと

しても、現代の「バーチャル」とは異なる意味での使用だったはずである。それでも、明治時代から「virtual」の訳語が「仮想」だったというのであれば、「仮想」の意味や使い方が現代と違っていたのではないだろうか。

こうした疑問から、「仮想」という漢語の成立の歴史と、訳語として使われた変遷を明らかにしようと考えた。

以下、本稿では「仮想」の字体を使うことを原則とする。一部、中国語の文献や辞書、漢和辞典の掲載などの説明をするのに必要な場合には「假想」を使う場合もある。

二．先行研究

「仮想」の漢語としての歴史について触れているものは佐藤(二〇〇七)だけである。幕末からの用例が示されており、品詞はサ変動詞である。

一方、「仮想現実」という訳語については、前に述べた小谷野(二〇一四)、館ほか(二〇一三)以外にも桜井(二〇一八)が「バーチャル」を「仮想」と訳すことの問題点を「仮想通貨」ということばに関連させて述べている。³⁾

そんな言葉(筆者注:「仮想」ということば)を疑問や検討もなく、ただ以前からVirtualの訳語として「仮想」を使っていたから、そのままでいこうとなったのだろうか、「仮想」と「実質的な」では意味が相当に違うだろう。再度いうが、「仮想」という言葉は、私にとってはどうも「ニセモノ」の響きがあり、法廷通貨に対する「ニセ通貨」、つまり「私鑄

貨」「私鑄銭」のイメージを感じさせる。

しかし、これらの指摘は英語の「virtual」の意味と「仮想」という語とは意味が違いすぎるといふ意見を述べるだけで、「仮想」を使わない場合には、ほかにどういふ語がいいと考えるのかといった提案はない。

谷島(二〇一〇)には「virtual memory」に「仮想メモリー」「仮想記憶」という訳語がつけられた経緯が次のように書かれている。

「仮想」と聞くと、かなり前のことですが、日本IBMでシステムエンジニアをしていた方が「virtual」を仮想と訳した責任は我々にあります」と反省の弁を述べたことを思い出します。米IBMがvirtual memoryを発表したとき、日本IBMが仮想記憶と翻訳しました。virtualの意味は「事実上の」「実質的」ですから、virtual memoryとは「本来のメモリーではないが事実上のメモリーとして使える技術」を指します。ところが、仮想記憶と訳したため、実体がない想像上のメモリーという印象を与えてしまい、しかもコンピュータの世界でvirtualが出てくると必ず仮想と訳されるようになりました。同氏が「もつといい訳にしておけば」と悔やむ所以です。

この谷島(二〇一〇)にある「本来のメモリーではないが事実上のメモリーとして使える技術」というのが、「virtual memory」の訳としてわかりやすいと感じられるが、言いかえのことばとしては長く、ここでも、別の語の提案はされていない。

このように、先行研究の大半はバーチャリアリティーの技術

を研究する立場から、「virtual」の訳語として「仮想」が適していないという意見を述べるものであり、「virtual」の翻訳の歴史や、「仮想」という漢語の歴史についての調査は乏しい。

管見の限り「virtual」「virtual reality」の翻訳の歴史について述べた唯一のものに谷(二〇二〇)がある。「VR」の訳語として「仮想現実」が使われていることに疑問を持つ立場で論じている。「仮想現実」と訳されるようになったのは明治時代の訳語が一因なのではないかという問題意識をもち、明治時代に物理学用語として「virtual image」「virtual work」が、「虚像」「仮の仕事」などと訳された経緯、「virtual」に「仮想」という語が当てられた経緯、時代が下って「virtual memory」が「仮想記憶」と訳された経緯、それぞれの時代の訳語についてまとめている。

また、「仮」と訳すことまでは理解できるが、「想」を加えて二字漢語としたのはなぜかという疑問も述べている。「仮想」という語の問題点を語の成立にさかのぼって考えている点で谷(二〇二〇)と本稿のテーマは重なる部分があるが、本稿は「仮想」という漢語の成立の経緯と使われ方の変遷を中心にまとめるものである。「virtual reality」の訳語の変遷を中心に述べている谷(二〇二〇)とは異なる問題設定であると考えている。

また、「virtual」の訳語を考えるためにも、「仮想」という語の成立や語の変遷を調べることが有用であると考えている。

三. 「仮想」はいつごろから使われているのか

さて「仮想」はいつごろから使われている語なのだろうか。

『日本国語大辞典第二版』(二〇〇一・二〇〇二・小学館、以下『日国』)には明治時代と大正時代の用例が示されている(太字は筆者による。以下同様)。

仮にこうだと考えること。仮の想定。想像。

*真善美日本人(一八九一)△三宅雪嶺)日本人の任務・二試に瞑目して茲に強大なる国家と弱小なる国家とありと**仮想せよ**

*竹沢先生と云ふ人(一九二四―二五)〈長与善郎〉自序
現在に於ける自分の主観を表現する目的のために『竹沢先生』及びその周囲の人物を**仮想**したにすぎない。

佐藤(二〇〇七)には「仮想」の用例が五つ示されており、『日国』に示されている用例よりも古い幕末の例が見られる。

向來割拠亂離の際を**仮想**せんに、西海にてハ、両肥薩州の三藩互に衡を争ひ(『江湖新聞』十六条 慶應四年(一八六八)五月五日)

他ノ不幸ニ拠テ貧乏トナリシモノト**仮想**セヨ、果シテソサイテヨリ之ヲ救フベキヤ(『郵便報知新聞』 明治八年(一八七五)八月二十八日)

試ニ**仮想**セヨ財主木綿ノ製造ニ卸ロス可キ一錢ノ財本ナキニ(明治九年(一八七六)三月『草莽雜誌』一号)

空屋ヲ発見シ其敗壞シタルニ拘ハラス其家甚タ汝ノ嗜好ニ適ヘリト**仮想**せよ(明治一四年(一八八二)『社会平権論』六・四)

条約會議ニテ附与スル權利ヲ使用シテ、之ヲ承諾セズト**仮想**セシ(ボアソナード・明治二〇年(一八八七)「裁判権ノ条

約草按二関スル意見)

また、「日本語歴史コーパス」(以下C H J)で語彙素を「仮想」として検索したところ三三件の用例が見られた。古い用例は『東洋学芸雑誌』(一八八一)のものである。

「人為淘汰によりて人才を得るの術を論ず(二) 加藤弘之
今日ニ在テハ十分ニ之ヲ究ムル甚タ難ク又縦令之ヲ究メ得ヘ
シト**仮想**するものなり

早い段階での「仮想」の用例には「仮想する」「仮想せよ」など動詞としての使用が多い。なお、C H Jにおいて、「仮想」が名詞・形容動詞などとして使われる例は、『国民之友第八号』(一八八七)に掲載されている『理論實際の和解法』(伴直之助)が古い例である。

また、国立国会図書館デジタルコレクション(以下、デジタルコレクション)では、『兵員要語帖』(一八八四)が最も古い例として認められる。『兵員要語帖』は、山田(二〇〇三)によれば、「兵員にとつての要語を集めて示す語彙であり、同時に習字の手本であつて、中世以来の、いはゆる往来物の一種といふことができる」資料である。ここに「仮設仮想」という語が示されている。デジタルコレクションにおける次に古い例は「官報(一八八八・一一・二二)」である。陸軍省の発表で「近衛砲兵連隊ハ明後二十四日府下神田三崎町練兵場ニ於テ**仮想射撃**ヲ施行ス」とある。このようにデジタルコレクションには、軍隊用語での使用が目立ち、それらには動詞の使用は見られない。

新聞ではどのように使われていたのかを朝日新聞、読売新聞、毎日新聞で調べたところ、読売新聞での使用が古く、一八八八年

五月一六日に「仮想射撃演習」という語が見られる。朝日新聞では「仮設敵」という語が一八八五年にある。これは「仮想敵」と同じ意味の語である。朝日新聞において、「仮想」が使われるものとも古い例は一九〇一年の記事で、新聞小説について注意として「仮想の人物にして實在の人をよそへたるにはあらざる事」とある。現代であれば「架空」が使われる場面である。なお、毎日新聞の「仮想」の使用は時代が下って一九五〇年以降の用例しか見られない。

このほかGoogle booksで検索し、いつごろの出版物から「仮想」の文言が使われているかを確かめた。内容を確認できるものは『英米議會典型』(一八九〇)が最も古いものである。

其**仮想的**若クハ条件的二言語ヲ用ユルニ拘ハラス其意味タル直接ノ抗撃ヲ為サントスルコト明白ナルトキハ(略)マンナース、サットン氏曰ク**仮想的**ニ事実ヲ述フルモ其事実自カラ背規ノモノナルトキハ之ヲ以テ規則ヲ免カル、コトヲ得サルコトヲ知ラサルヘカラスト

では、国語辞典、漢和辞典などに「仮想」はいつごろから立項されているのだろうか。

まず国語辞典は『漢英対照いろは辞典』(一八八八)、『言海』(一八九二)、『日本大辞書』(一八九二)、『ことばの泉』(一九〇八)、『辞林』(一九一一)、『大日本国語辞典』(一九一五)、『広辞林』(一九二六)、『言泉』(一九二七)、『大言海』(一九三二)、『大辞典』(一九三四)、『辞苑』(一九三五)、『言苑』(一九三八)、『小辞林』(一九四九)、『辞海』(一九五二)を調べた。立項されていた辞書とその意味は表1のとおりである。今回調べた中では、初

表1 「仮想」の辞書立項

辞書	意味
広辞林 (1926)	仮定しての想像。 かりのおもひやり。
辞苑 (1935)	仮定的の想像。
言苑 (1938)	仮定的の想像。
小言林 (1949)	かりに考えること。仮説。
辞海 (1952)	仮に想定すること。 仮定的想像。「-敵国」

う意味であり、『広辞林』の「仮想」の最初の掲載は、「遐想」と似た意味のようである。

漢和辞典には『新編漢語辞林』(一九〇四)に「假想」の掲載があり、「カリニカンガヘル」という意味が示されている。類似の語に「假像(かしよう)」があり「マボロシノスガタ。||カタチハナクテ、アラハレルトオモハレルスガタカチ」という意味がつけられている。この漢和辞典は山田美妙がまとめたものだが、これ以前に、山田美妙によって作られた『日本大辞書』(一八九二)および『漢語故諺熟語大辞林』(一九〇一)には「假想」「仮想」は掲載されていない。なお、『漢語故諺熟語大辞林』(一九〇

出は『広辞林』(一九二六)である。ここにある「かりのおもひやり」について、現代の国語辞典にある「かりにそう思うこと。想像」(『新選国語辞典第九版』、以下『新選』)とは意味が違うように感じられるが、「おもひやり」とは、「遠く離れている人や所などについて想像する」(『新選』)という意味の「おもひやる」の名詞形と考えられる。『日国』には「遐想」という表記の「かそう」もある。「遠く隔たった人を思うこと」とい

四. 「仮想」は和製漢語なのか

ここまで調べたことから、「仮想」は幕末から使われる例があるものの、用例が増えるのは一八八〇年代に入ってからであることがわかる。また、漢和辞典への掲載は一九〇〇年ごろから行われているが、国語辞典に掲載されるのは大正末期であり、使われ始めてから国語辞典掲載まで時間がかかっている。使われ方は現代と同様「仮想敵」「仮想的」「仮想射撃」などの複合語の例が多い、一方、現代とは使い方が異なる「仮想する」「仮想せよ」など動詞として使う例も多い⁶⁾。特に、古い例では動詞での使用がほとんどである。なお、「仮想」の用法の変化については後述する。次に、日本では主に近代になって使われるようになった「仮想」は日本で作られた漢語なのか、あるいは、中国から日本に流入した語なのかを考える。

まず、『英華字典』に「仮想」あるいは「假想」がないかを中央研究院近代史研究所「英華字典」のサイト(<http://mhdb.nh.sinica.edu.tw/dictionary/index.php>)を使い調べたが、いずれの漢字表記でも掲載はなかった。『漢語大詞典』には「假想」「假敵」が立項されており、「假想」は、郭小川(一九一九〜一九七六)の詩の用例と呉晗(一九〇九〜一九六九)による用例が示さ

れている。「假想敵」は楊沫（一九一四～一九九五）による用例が示されている。いずれも二〇世紀に活躍した人物による用例である。

加えて、「假想」は、和製漢語に多く見られる語構成である。

すなわち「仮に想定する」あるいは「仮に想像する」と考えることができ、「副詞↓動詞」の連用修飾という構造である。陳（二〇〇一）によれば、連用修飾による語構成は中国語では語になりにくいパターンであるという。そのパターンの中に「副詞↓動詞」のものが含まれている。例えば「最愛」「直行」などである。「假想」は、日本で作られた、いわゆる和製漢語であり、それが、中国に取り入れられたとも考えることができそうだ。

一方で、「假想」は仏教用語として「けそう」という語形で古くから使われている。「假想（けそう）」は『日国』に「仮にあるものとして観ずること。假想観察とも」、また『佛教語大辞典縮刷版』（二九八一・東京書籍）にも次のようにある。

假想（けそう） 仮に考えて観念すること

（一）天台宗では歡心と同じ

（二）禪宗では身体などを仮に想定すること。

なお、「歡心（かんじん）」は「心を觀察すること。自分の心の本性を明らかに觀照すること。（略）心は一切事物の根本でもあり、迷いのもともであるから、自己の心の本性を觀すべきことを強調する」という意味の語である。

中国における用例を中央研究院歴史語言研究所「漢籍電子文獻資料庫」で調べたところ『大正新修大藏經』に収録されている「大般若波羅蜜多經」「禪秘要法經」「父子合集經」に「假想」の

用例がある。また北京語言大学の中国語データベースの『大般若波羅蜜多經』にも「假想」の用例がある。『大漢和辞典』（大修館書店）にも「假想」で立項がある。

こうしたことから、「假想」は仏教用語として、中国で作られた「假想」が、日本でも仏教用語として取り入れられた語であるという考え方もできそうだ。

仏教用語では「けそう」と読まれ、「仮に考えて観念すること」などの意味でそれぞれの教義の中で使われていた。これが幕末になって広く使われるようになったとは言えないだろうか。語形については「けそう」から「かそう」に変化しているが、「け」は「呉音」、「か」は漢音である。漢字音は明治時代以降に呉音から漢音に変化する傾向が顕著だとされる（『大辞林第四版』特別ページ「漢字音・漢語」など）。こうした流れの中で「假想」についても呉音の「けそう」から漢音の「かそう」に変化していったものとも言えるだろう。

しかし、この仮説には問題点もある。仏教用語としては現代でも「けそう」の語形のまま残って使われているためである。仏教用語としては「けそう」を残しながら、「かそう」の語形が一般語化すると思われるのは無理がある。こうしたことから「かそう」の「假想」は仏教用語の「けそう」とたまたま同じ漢字の組み合わせになった別語であり、やはり最初に述べたように、日本で作られた新しい漢語であるという仮説を立てることもできそうだ。

本稿では、ひとまず、①「仮に考える」などの意味で、幕末ごろから日本で「假想（かそう）」という漢語が作られ、この和製漢語が、中国でも使われるようになった。仏教用語の「假想」（け

そう)とはたまたま漢字の並びが同じになっただけである。②仏教用語として使われていた「仮想」(けそう)が幕末になり、「かそう」という語形に変化し、一般にも使われるようになった。この2つの説を仮説として示すにとどめる。

五. 用法の変化と使用範囲

五・一 外国語の翻訳としての使用

続いて、「仮想」はどのように使われたのかを、翻訳語としての使用から調べる。

明治時代に翻訳本として発行された本と、原語の本とを比較する。比較する本は、Google booksの検索によって抽出できた『日新叢書政治及経済』(八尾書店発行、一八九四)である。この本は「英国ケンブリッジ大学講師・トリニチー大学主教」の「ダブリュー・カンニングハム」が書いた『Politics and Economics』を訳したものであり、もとの英文と比較することが出来る。日本語翻訳には次のようにある。

第5章 今世の経済原理

放任主義の経済論は英国政治家か純粹理説に懐ける疑俱に由りて悩めるは真なり、元來此学説は**仮想的社会的**の状態に就て論するか為に純粹学理の姿を呈し、其原理を人生の事実問題に適用するに於ても亦實際の困難を生したり。

この部分の原文は次のとおりである。

It is true too that the *laissez faire* Political Economy has suffered from the suspicion which English statemen feel of

abstract principles : it has taken the form of an abstract science, arguing with regard to an **hypothetical state of society**, and there has been a real difficulty in applying its maxims to the actual problems of life.

「仮想的社会」が「hypothetical state of society」の訳語として使われている。これをヒントと「hypothetical」が学術用語、英和辞典などどのように訳されていたのかを調べる。

まず、学術用語での使用を調べたところ、『教育・心理・論理術語詳解』(一八八五)において心理学のことばとして「hypothetical」が「仮想」と訳されている。

次に、英和辞典での掲載を「hypothetical」と「仮想」「仮想」の意味を持つ語として『新和英大辞典』(一九七四・研究社)に掲載されている「imagination」「imaginary」「supposition」の掲載も合わせて調べることとする。「仮想」が見られるのは、今回調べた辞書の中では『双解英和大辞典』(一八九二)における「hypothesis」「imaginary」の語釈が最初である。

前に述べたように、デジタルコレクションにおける「仮想」の初出は「兵員要語帖」(一八八四)であり、そのほかの用例でも「仮想敵」「仮想敵国」などの軍隊用語として使用されている。そこで、次に、軍隊用語の翻訳語として使われた例はないかを調べる。楳垣(一九六三)によれば、幕末に幕府はアメリカ、ロシア、イギリスなどの外国船に備えて、軍備を強化するにあたって、当時幕府と貿易を行っていたオランダが軍隊の指南をした。このときに、フランス人の教官もいたことから、軍隊関係の用語にはフランス語が入っている。こうした事情から「軍専用語辞典」のほ

かに「仏和辞典」の記述も確認する。

「hypothétique」[imagination]「potential」[supposition]とそれぞれの関連の語の掲載を『官許仏和辞典』(一八七一)、『仏和辞書』(一八八六)、『仏和法律字彙』(一八八六)、『仏和陸海軍術語字彙』(一八八七)、『改正兵語辞書・仏和対訳之部』(一八八八)、『仏和字彙』(一八九三)、『仏和辞典』(一九〇二)、『新仏和辞典』(一九一九)で調べた。

『仏和辞書』(一八八六)において「supposition」は「仮定」、『仏和法律字彙』(一八八六)において「hypothétique」は「仮設」に訳されているが、いずれの訳語にも「仮想」はない。

軍服用語については、『五国対照兵語字書』(一八八一、フランズ語、ドイツ語、英語、オランダ語、日本語の五か国語の対照であり、参謀本部がまとめたもの)、『兵員要語帖』(一八八四)、『和英英和兵語辞典』(一九〇五)、『独和兵語辞典』(一九一一)、『最新和独兵語辞典』(一九二二)、『大日本兵語辞典』(一九二八)、『最新図解陸軍模範兵教典』(一九三七)において、訳語や項目に「仮想」とあるものを調べた。「仮想」は、『兵員要語帖』(一八八四)と『最新図解陸軍模範兵教典』(一九三七)に掲載されているのみである。なお、「仮想敵」と同様の意味で使われていると考えられる「仮設敵」という語は、『和英英和兵語辞典』(一九〇五)、『最新和独兵語辞典』(一九二二)、『大日本兵語辞典』(一九一八)、『最新図解陸軍模範兵教典』(一九三七)にある。元になる英語は「imaginary」である。

最後に「virtual」の訳語についてまとめる。この問題については、谷(二〇二〇)にくわしいため、ここでは、谷(二〇二〇)

にまとめられている内容のおおすじを述べるにとどめる。

『英和対訳袖珍辞書』(一八六二)では「強キ」などの意味がつけられている。これに『新訳英和辞典』(一九〇二)において「仮りの」⁹⁾「虚」などの意味が加わる。学術用語としては、これ以前の一八八八年の『物理学術語和英仏独対訳字書』に「仮の」「虚像」などの訳語が示されており、『新訳英和辞典』の訳は学術用語をもとにしたものだと考えられる。

「virtual」に「仮想」の訳がつけられたのは一九二八年発行の『和英及び英独和物理学用語新辞典』が最初である。

なお、谷(二〇二〇)には触れられていないが、筆者が調べたところ、次のことがわかる。

「仮想」は、「virtual」の訳語として使われる以前の一八八五年には「hypothetical」の訳語として心理学の学術用語として使われている。また、英和辞典では「hypothetical」「imaginary」の訳語として一八九二年に「仮想」が使われている。軍服用語としての「仮想射撃」「仮想敵」などの使用は「imaginary」の訳語によるものと考えられる。こうしたことから、「仮想」は、「hypothetical」「imaginary」の訳語として使われ、一般化した可能性はあるが、「virtual」の訳語として使われるようになった語ではない。

五・二 用法の変化

ここまで「仮想」という語の歴史についてまとめた。次に「仮想」の用法の変化について考える。『大辞林』には「仮想」のほ

かに、複合語として「仮想移動体通信事業者」「仮想化」「仮想記憶」「仮想現実」「仮想事故」「仮想私設通信網」「仮想水」「仮想通貨」「仮想敵二」「仮想敵国」「仮想マシン」「仮想モジュール」といった語が載っている。このように現代では「仮想」は「仮想」+「名詞」の形で使われることが多いが、幕末、明治期の用例は「仮想する」などの動詞としての使用が多い。これは3章で述べたとおりである。また、佐藤(二〇〇七)も、「仮想」をサ変動詞として説明している。

実際に、明治時代から戦前の時期に「仮想」がどのように使われていたのかを神戸大学附属図書館デジタルアーカイブ「新聞記事文庫」(以下「神戸資料」)に見られる例から調べる。このアーカイブは神戸大学経済経営研究所によって作成された明治末から昭和一八(一九四三)年までの新聞切抜資料により構成されている。対象となる記事の数は二万二〇〇〇件である。

このアーカイブにおける「仮想」の使用例は、一九二二年を最初として六三三件である。この中で名詞としての使用は四八三件、動詞の使用は一五〇件(24%)だった。これと現代の使用を比較するために読売新聞のデータベース「ヨミダス歴史館」を使用し、一九八六年から二〇二〇年七月八日までの読売新聞で使われた「仮想」を調べた。「仮想」の使用は七三三七件であり、そのうち「仮想す」「仮想し」「仮想せ」などの動詞での使用六一件(0.8%)だった。「神戸資料」における「仮想」の動詞としての使用が多いことがわかる。

なお、「神戸資料」の動詞としての使用例には以下のようなものがあった。

不利な解散の場合を**仮想**しても

この不安を**仮想**して国際協定今後の成行に非常が憂慮をかける

夕夕になった場合を**仮想**すればわかる

不測の場合を全然**仮想**せず

五・三 「仮想」の使用範囲

「神戸資料」における複合語としての「仮想」の使用例は次のとおりである。

仮想的、仮想線、仮想敵、仮想益金、仮想敵軍、仮想説、仮想敵国、仮想成績、仮想問題、仮想日独同盟、仮想負担額、仮想案、仮想物、仮想兵力、仮想思惑、仮想連合敵国、仮想民、仮想需要、仮想貨幣、仮想攻勢力、仮想預金、仮想田園都市図、仮想景気、仮想爆弾、仮想信用、仮想交戦国、仮想債権、仮想値下り、仮想戦争計画、仮想対国、仮想海軍敵、仮想増額高、仮想標準、仮想案、仮想舶来品、仮想警備、仮想敵機飛来、仮想警備演習、仮想陸地、仮想巡洋艦、仮想大敵艦隊、仮想採算、仮想単位、仮想電灯料金、仮想会社、仮想観念、仮想攻撃、仮想沈没、仮想計数、仮想相手国、仮想防空壕、仮想国、仮想国(出現順)

特によく使われる語は「仮想敵国」「仮想敵」である。そのほかの複合語では「仮想人物」「仮想会社」など「架空の」という意味での使用である。「仮想会社」は「ペーパーカンパニー」と同じ意味で使われている。

「仮想会社」の使用例（一九三三年八月一六日・神戸新聞）

しかもその後事業の手を抜けるに従い次第に欠損を生じ一
万数千円の金に詰まったところから更に資本金十萬円の**仮想会
社**福徳商事株式会社を組織し福徳合資会社の権利義務を新会
社に継承したと称し、巧に世間体を繕い益々大仕掛けに社員、
集金人を募集し貯金総額は十萬円を突破する盛業振りを見せ
西宮、姫路、大阪、若松、撫養等にもインチキ会社を建てて
魔手を伸ばしていた（略）

実際に流通していない貨幣として「仮想貨幣」という語も見ら
れる。

「仮想貨幣」の使用例（一九四〇年六月一九日・大阪朝日新聞）

元来海関両は支那に於て銀両の盛に流通された時代に各地
銀両の實際価格の不同より生ずる政府収入を確実にせんが為
めに特に設けられた一種の**仮想貨幣**で其の関税に使用するも
のを海関両と云い関税以外に官衛出納に使用するものを庫平
両と云うたものであるから

現代では、インターネット上で流通する「仮想通貨（暗号資
産）」があるが、指しているものは違うものの、一九四〇年にも
類似的の複合語が使われていたことがわかる。

また、現代の「仮想」では見られない用法としては、「非常呼
集を行い仮想警備につかしめ」「配備は仮想で一まず解散するの
だが」など、本番ではないが、限りなく本番のつもりで行う「訓
練」あるいは「演習」という意味での「仮想」である。

このほか、デジタルコレクションで調べても「仮想〇〇」の用
例は、今よりも広い意味・場面で使われている。例えば、『農学

会会報（一五）（一八九二）では「植物ノ窒素吸収ニ関スル一新
仮想」とある。「仮説」という意味である。『日本大家論集四（一

二）（一八九二）には、「仮想演説」とある。このほか「仮想対
談」などの用例も見られるが「架空」などの意味である。「架空」
という意味では、「基督は果たして仮想の人物乎」（『声（四七
六）』、一九一五）、「仮想人物」（『英語青年（三）（六七〇）』、
一九二四）などの用例もある。『毛皮日本（四）（一九三九）』には、
動物の「想像妊娠」のことを「仮想妊娠」として紹介している。

「神戸資料」には見られなかったが「偽装」という意味での使用
も見られる。『幽霊部屋（一九四〇）』には「仮想結婚」とあり、
内容を見ると「偽装結婚」の意味である。英語の「仮定形」が
「仮想形」、「神戸資料」にもあったが「想像図」という意味で「仮
想図」が使われる例も見られた。

このように、「仮想」の使用範囲は現代よりも広がった。「仮想」
が使われていた場面で、その時代には「架空」「仮定」「想定」
「空想」などが使われ、「仮想」の使用は限定的になり「仮想敵国」
「仮想現実」など決まった語でしか使われなくなったということ
だろう。

なお、動詞としての使用にも同様のことが言える。現代であれ
ば「想像する」「仮定する」ということはが使われるような場
面で「仮想する」が使われている用例が見られた。「想像」は『大辞
林』に、「ロプシャイト」「英華字典」（一八六六〜六九）に
「imagination」の訳語として載る。日本では「英仏単語便覧」
（一八六六）に載る。また「仮定」は同様に『大辞林』に
「田口卯吉『日本開化少史』（一八七七〜八二）に見える」とあ

る。「仮想する」が使われていた場面で、のちに「想像する」「仮定する」という語が使われるようになったということも考えられそうである。「想定」も『日国』「仮に、ある状況や条件を考え定めること。ある状態を仮定すること」という意味であり、用例として『経国美談』（一八八三—一八四）が示されている。こうした類義語と「仮想」とはどのように使い分けられたのか、また、のちに使い方が変化したのかなどは、今後の調査課題としたい。

六. まとめ

「仮想」という語の歴史を調べた。

本稿では「仮想」という漢語の由来について、次の2つの仮説を示した。

- ①幕末に「仮に考える」などの意味で、日本で「仮想」（かそ）という漢語が作られ、中国でも使われるようになった。なお、仏教用語として「仮想」があるが、これは「仮想現実」などとして使われている「仮想」とは別語であり、たまたま漢字の組み合わせが同じになっただけなのではないか。こうしたことは、中国での「仮想」の用例が二〇世紀以降のものばかりであることからわかる。

- ②「仮想」はもともと仏教用語として中国から日本に伝わった漢語であり、日本では「けそう」という語形で仏教用語として使われていた。この語が、幕末ごろから一般にも使われるようになり「かそう」として現代に伝わった。この「かそう」の語形は、明治時代に漢字音が呉音から漢音に変化したこと

によるものである。

この仮説のほか、「仮想」について次のようなことがわかった。「仮想」は、いくつかの英語の翻訳語として、明治時代から使われていることがわかった。軍事用語（imaginary）や心理学用語（hypothetical）の翻訳語として使われ始めた語である。なお、谷（二〇二〇）により「virtual」と「仮想」が結びついたのは昭和の始めであり、学術用語での使用であることがわかった。

最初に述べたように、バーチャルリアティー学会などは、明治以来「virtual」の訳語として「仮想」を使ってきたことを問題視しているが、「virtual」の訳語として明治時代から「仮想」が使われてきたという事実はない。

「仮想」の用法は変化している。当初は、動詞として使われる場面も多かったが、現代では、動詞での使用はほとんど見られない。「仮想する」の使用は、「想像する」「仮定する」などの類義語が担っている。また、現代では「一敵」「一敵国」「一現実」といった特定の名詞と結びついて使われることが多いが、当初はさまざまな名詞と結びついて多くの複合語を作っていたことがわかった。この複合語から、当初は「仮想」として使われていたものが、のちに「架空」「仮定」「想定」「空想」に置き換わったものがあることがわかった。

今回調べた中では、軍事の専門用語としては「仮設」であり、それが新聞などで一般に知られる際に「仮想」に変更されているように見えるものがあった。例えば、「軍事用語」では「仮設敵」が見られるが、新聞では「仮想敵」が見られるのみである。最後に触れた類義語との使い分けとともに今後の研究課題としたい。

(1) 引用したニュースでは「VR」を使つたうえで、「仮想現実」と言い添えをしているが、NHKにおいては「バーチャル」を「仮想現実」に言いかえるという決まりは作っていない。現に二〇二〇年五月二九日のNHKニュースでは「VR（グイアー）ル」、バーチャルリアリティーとのみで、「仮想現実」などの言い添えはしていない。「VR」の言いかえとして「仮想現実」を使うことを避けるようになったのかははっきりしないが、NHKでは「仮想現実」という言いかえを使わない例も増えているように感じられる。新聞社・通信社のハンドブックでは、「読売新聞用字用語の手引第5版」が「バーチャル↓仮想、仮想世界」という言いかえ語をつけて掲載している。

(2) 「仮想」以外でも本稿では、原則として旧字体の漢字は、常用漢字表の字体に直して示した。中国関係の文献には、「假」の字が使われている。この字と「仮」について、陳(二〇〇一)は本来意味が異なる漢字であると述べている。「假」は「いつわり」「うそ」などの意味だが、「仮」は身を傾けるなどの意味だという。例えば、『増訂華英通語』には「pose」に中国語の「假」が示されており、「ウン」と訳されている。本来はこの二つの漢字をわけて考えるべきだが、本稿で調べる「かそう」の場合「仮想」でも「假想」でも意味は変わらず、こうした漢字の使い分けは関係ないと考える。ただし、中国語の辞書の掲載や漢和辞典の掲載を述べる場合には、「假想」の立項があれば、この字体を使用した。また、コーパスの検索の際は「仮」と「假」の両方で検索した。

(3) インターネット上で架空の「通貨」として取引されるビットコインなどのことを「仮想通貨」という。この名称については二〇一八年一月一日に金融庁の有識者会議が「暗号資産」

に言いかえるように報告書を出した。また二〇一九年三月五日には政府が「仮想通貨」を「暗号資産」とすることを閣議決定した。これは「通貨」ということばをつけることで、日本円やドルなどの法定通貨と誤解されることがあるのではないかと、という点が問題とされた言いかえのようだ。

(4) 現代の国語辞典では「仮象」の表記で「実際に存在するように感覚に現れながらも、それ自身客観的な実在性をもたない形象」(『大辞林第四版』)という掲載がある。「仮像」の表記の語は「かぞう」という読み方で『日国』に「外形を保つたま別の鉱物に置き換えられた、ある鉱物」という意味で掲載されている。

(5) 『近代用語の辞典集成』(大空社)に収録されている「新語辞典」を調べたところ「仮想」と同音の「仮相」が掲載されていた。掲載されている辞書と語釈は以下のとおり。この「仮相」は本稿で調べる「仮想」とは異なる意味の語である。

『現代日用新語辞典』(一九一八)

かそう「仮相」自分の感じ又は空想の作用によつて実在より離れたる現象をいふ、仮の現象であつて又まぼろしとも云ふ

『新しき用語の泉』(一九三三)

仮相 実在でない物象、即ち仮りの現象、感覚若しくは空想の作用によつて、実在より遊離した現象のこと。

(6) 『現代日本語き言葉均衡コーパス』(BCWJNT)において「仮想」+「名詞」+「仮想」+「動詞」+「助詞」などとして、「仮想」がどのように使われているかを調べた。「仮想する」などの「仮想」+「動詞」の形は一二例、「仮想現実」(「仮想的」など)「仮想」+「名詞」の形は三七九例、「仮想の個人」など「仮想」+「助詞」の形は五〇例見られた。「仮想」+

「動詞」の形が現代の日本語で使われないわけではないものの、「仮想」＋「名詞」など語構成要素として使われる例が多いことがわかる。

(7) Google books で「仮想」を検索語として調べた。期間指定を一九世紀とし、内容もチェックできる文献を探した。また、今回は訳語としての「仮想」を調べることを目的としたため、それらの文献の中で英文の原文があるものを抜き出した。

(8) 『英和对訳袖珍辞書』(一八六二)、『和訳英辞書』(一八六九)、『英和对訳字書』(一八七二)、『附音挿図英和字彙』(一八七三)、『英和字彙』(一八八二)、『英和对訳辞典』(一八八五)、『英和对訳新辞林』(一八八七)、『双解英和大辞典』(一八九二)、『英和新辞林』(一八九四)、『新英和辞典』(一九〇二)、『新訳英和辞典』(一九〇二)、『熟語本位英和中辞典』(一九一八)、『英和辞典』(一九二八)、『袖珍英和辞典』(一九二九)、『井上英和大辞典』(一九二五)、『新英和大辞典』(一九二九)、『新英和大辞典』(一九四〇)、『双解英和大辞典』(一九六六)を調べた。本文にあるように、『双解英和大辞典』の掲載以降は、『新訳英和辞典』の「Hypothetical」に「仮想」や「Hypothesis」に「仮想」の「Hypothetically」に「仮想的」の意味がある。『井上英和大辞典』、『新英和大辞典』にも「Hypothetical」「Imaginary」に「仮想」の語釈が見られる。

(9) 『OED』によれば、「virtual」は一四世紀の中期英語が初出であり、ラテン語の「virtue (力、男らしさ)」から転じた語である。原義は「本質的な力がある」。日本へは、まずこの原義が流入したものと考えられる。英語では一七世紀に物理用語として「virtual」が使われるようになっており、これが「物理学術語和英仏独対訳字書」(一八八八)で「虚焦点」「虚像」「仮りの」などの意味で示されたものと考えられる。

参考文献

- 棟垣実 (一九六三) 『日本外来語の研究』(研究社)
- 小谷野敦 (二〇一四) 『ヴァーチャル』『頭の悪い日本語』(新潮社)
- 桜井澄夫 (二〇一八) 『叢談カードの世紀 第一五四回 用語の標準化と業界の姿勢(上)』『バーチャル』はなぜ「仮想」なのか『月刊消費者信用』二〇一八年七月号
- 佐藤亨 (二〇〇七) 『現代に生きる幕末・明治初期漢語辞典』明治書院
- 舘暲・佐藤誠・広瀬通孝 (二〇一〇) 『バーチャルリアリティ学』コロン社
- 谷島宣之 (二〇一〇) 『巻頭言』『日経コンピュータ』二〇一〇・三・三十一
- 谷卓生 (二〇二〇) 『VR⇨バーチャルリアリティは「仮想」現実か? virtual の訳語からVRの本質を考える』『NHK 放送研究と調査』七〇一
- 陳力衛 (二〇〇一) 『和製漢語の形成とその展開』(汲古書院)
- 山田俊雄 (二〇〇三) 『兵員要語帖』といふ資料』『日本のことばと古辞書』三倉堂
- (やました ようこ) 本学大学院博士後期課程